
東方幸運録

シュン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方幸運録

【Nコード】

N01310

【作者名】

シュン

【あらすじ】

他人の3倍どころか、30000倍くらい幸運な少年が幻想郷に呐喊する！

少年は無事に生きのびることができるのか！？

この小説は主に作者の願望、野望、欲望、妄想により構成されています。注意して読みましょう。

プロローグ 『え？自殺？あんた馬鹿なの？死ぬの？ うん。死ぬ』（前書き）

小説書くの初めてなんで、生温かい目で読んでももらえると嬉しい
す。

ブローグ 『え？自殺？あんた馬鹿なの？死ぬの？ うん。死ぬ』

僕が自分の異常性に気がついたのは、中学一年生の時だった。

小学校の頃までは自分は他人より、少し運がいいかなくらいに思っていた。

でも、その認識は合っていたけど間違ってもいた。

初めは、中学の前期の中間テストの時のこと。

僕はあんまり勉強が出来るほうではないと思う。

テストを受けた後も普通に平均点に届いているかな？と、そのくらいに思っていた。

しかし、返ってきたテストは全てが90点以上。

満点だって5教科のうち、3教科もあった。

何故？と疑問に思うのはあたりまえのこと。

すぐさま問題用紙と解答用紙を確認した。

すると驚く…というか、もはや驚愕だったが、勘で書いた記号問題が全て当たっていた。

その数…合計で94問。

……心底ありえないと思う。

勘で当てたテストの記号問題はほとんどが4択で、2択が3つだけ。つまりは4の91乗と、2の3乗をかけた数分の1だから…

……家の電卓じゃ桁が入りきりませんでした。orz

まあ、とりあえずはもの凄く低い確立だと思ってください。

だが、これだけなら偶然？で済む。…いや、済まないかもしれないけど…。

ようするに、言いたいことは確立は0ではない！っていうことなんですよ。

でも、その後も普通ならありえないような幸運が続いた。

僕が学校に遅刻すると、必ず担任の先生が欠勤だったり、出張だったり。

もちろん、遅刻はカウントされなかった。

体育の授業でソフトボールをやることになったけど、面倒だったので適当にバットを振るが全てホームラン。

野球部の勧誘が尋常じゃなかったです。

もの凄く可愛い女の子から告白されたり。

ちゃんと傷つけないように断ったと思うが、精神的にかなりきつかった。

……とまあ、こんな感じに幸運が続きまくった訳です。

あ、ちなみにテストはあの後も勘で書いた記号が全て当たるといってありえない状況が続いていたりする。

……で、そんなこんなで中学三年生にまでなったんだけど……

自殺しようと思います。

……いや、まあ、正直贅沢すぎる気がするんだけど……

人生が本気でつまらないです。

……あ、やめて！トマト投げないで！卵もダメだって！

…ふう。とりあえず落ち着いて想像してみてください。

ポ モンでゆびをふるを使ったら、全部一撃必殺で必ずあたったら楽しいですか？

なかには楽しいと思う方もいるかもしれませんが、僕は楽しくないです。

という訳で、今、放課後の教室にいます。

そして、いざ！身をのりだして

「窓辺からやがて飛び立つ」

あ、ちなみに僕の名前は雷堂 幸稀（らいどう こうき）っていうから。

覚えいて！

プロローグ 『え？自殺？あんた馬鹿なの？死ぬの？ うん。死ぬ』（後書き）

主人公の名前をいつ出そうか悩んでたら、最後になってしまった。

o r z

第2話 『女の人+カオスフィールド』住居不法侵入の不審者』（前書き）

キャラ崩壊注意警報発令

第2話 『女の人＋カオスフィールド』住居不法侵入の不審者』

どうも。先程、飛び降り自殺を心みた雷堂 幸稀です。

結論から言うと、自殺に失敗しました。

……べ、別に途中で怖くなった訳じゃないんだよ!?

いや、ある意味怖かったというか気持ち悪かったというか…。

まあ、とりあえず何があったのかを説明しましょう。

僕はこれでやっとなまらない人生に終止符を打てると思い、気分よく窓から飛び降りようとした。

「窓辺からやがて飛び立つ」

?? ほとばしる熱い……ん?」

もう既にあと少し体を前に傾ければ自殺できるという時に、僕が見たものは……

なんか変な目玉がたくさんあって、上下に赤のリボンがついてる、

非情に気持ち悪い、遊 王の次元の裂け目みたいのがあった。

「……ふう〜。疲れてるみたいだ。今日はやめとくかな」

「なんでよ!?!なんでやめるのよ!?!早く飛び降りなさいよ!」

…あれ?どこからか声が聞こえたような……まあ、幻覚見るくらいだし、幻聴が聞こえても不思議じゃないか。

「さてと…。今日は暇つぶしに宝くじでも買つて帰る」

「ちょ!?!待ちなさいよ!聞こえてるんでしょ!」

今度は、はっきりと聞こえた。

それもあの気持ち悪い次元の裂け目から。

「なんですか?さつきから。あんまり騒がないでください。近所迷惑です」

「あ、すいません。気をつけます。…って何を言わせるの!?!近所迷惑って近くには私とあなたしかいないじゃない!?!」

…凄く元気ですね、この人。

まあ、このままからかって遊んでもおもしろそうだけど、話が進まないから真面目に聞いてあげますか。

「それで？あなたは僕に何のようなんですか？」

「よ、ようやくまともな会話ができ」「3、2、1、終了」……え？あつ！待ちなさい！」

はっはっは！生まれつき筋肉の着き方がいいおかげで100mを10秒台で走れるこの僕に追いつけるはずが「待てと言ったのが聞こえなかったかしら？」

……追いつかれるどころか先回りされちゃったZE

「さて、ようやく本題に」「そういえば今日、家庭科の授業でクッキー焼いたんですよ。食べます？」ええ、いただきますわ」

食うのかよ！と、心の中でツッコミながら僕は全速力で家まで逃げた。

【20分後】

「ああ、疲れた。今日は最悪の日だったな。」

僕はベッドに寝つ転がりながら、ふと視線を壁にかかっているカレンダーに移す。

そこには今日の日付のところに自殺記念日と書いてあり、上から赤いペンで花の模様が描かれていた。

「はあ。あの変な女の人さえいなけりや、今頃あの世で惰眠を貪ってただろうに。」

「あら、それは悪いことしたわね。」

「お母さん！ストーカーが、ストーカーが来た！！」

「誰がストーカーよ！誰が！」

「じゃあ、住居不法侵入の不審者でいいよ。」

「……グスッ。もういや。」

「ほら、泣かない泣かない。辛いことがあつたら、いつでも近所のおばさんに言いなさい。」

「そこは他人に押し付けるところじゃないでしょ！？」

「はい。まだクッキーあるから食べる？」

そう言つて、僕はカバンから1袋10個入りのクッキーの袋を20個とりだした。

「いったい何枚焼いたのよ!? しかも、あきらかに前の文と繋がってないじゃない!？」

「……クッキー……美味しくなかった? ……グスッ」

「え? あ、いや、美味しかったわよ? ……だから泣かないで」

「本当! ……じゃあ、今日はもう夜遅いから、明日来て。クッキー焼いて待つてるから!」

「ええ、わかったわ」

そう言つと、変な女の不審者は次元の裂け目に入つていった。

ふっ、計画通り。

さて、もう寝ようかな。

「って、騙されるか〜!!」

「グエ」

不審者さん上から降つてこないでください。

第2話 『女の人+カオスフィールド』住居不法侵入の不審者』（後書き）

とつとと幻想入りさせるつもりが長引いてしまった。

次こそは……

第3話 『いざ！幻想郷へ！呐喊します！』（前書き）

主人公の名前を変更しました。

ご迷惑をおかけして申し訳ありません。

第3話 『いざ！幻想郷へ！呐喊します！』

今、僕は住居不法侵入の不審者と向かいあって話をしていきます。

「……えーと、色々あって遅れてしまいましたが自己紹介をしたいと思います。」

僕の名前は雷堂 幸稀。気軽に雷堂って呼んでください」

「そこ普通苗字で呼ばせる！？気軽にって言ってるけど、全然気軽じゃないわよ！」

「趣味はギャンブル。特技は会社の株を買い占めて、実質的に乗っ取ることです」

「いきなり黒い部分をさらけ出さないでくれる！？」

「将来の夢は可愛いお嫁さんと普通に暮らすことです」

「嘘をつくんじゃないわよ！さっき、自殺しようとしてたじゃない！」

本当に元気ですね。この不審者さんは。

「……とまあ、こんな感じで僕の自己紹介は終わりです。次はあなたの番ですよ」

「……まあいいわ。私の名は八雲 紫。スキマ妖怪よ」

……今、なんと言った？

「そして、私があなたの前に現れた理由だけど、率直に言っと幻想郷にきて欲しいのよ」

おk。

これは面白そうな話だと僕の第七感が反応している。

「…その幻想郷というのはどんなところなの？」

「簡単に言っと、人と妖怪が共存する世界ね」

よし行こう。今すぐ行こう。

「ちょっと待ってて！3秒で仕度してくるから！」

【3・2秒後】

「ごめん。遅くなった」

「充分すぎるほど早いわよ！」

そうかな？

僕は0・197秒くらい遅れたと思ったんだけど。

「…それでは、いざ！幻想郷へ！…」と、思ったんだけど、どうやって行くの？」

「このスキマの中に入ればすぐに幻想郷に行けるわ」

そう言うと、八雲さんはあの気持ち悪い次元の裂け目みたいなもの（スキマと言っらしい）を開いた。

……なるほど。

だから僕が飛び降りようとした時、空中にスキマを開いてたのか。

僕、飛び降りる

スキマにin

幻想郷へgo

「…しかし、何度みても気持ち悪いね。それ」

「気にしてることを言うんじゃないわよ！」

……気にしてるんだ。やっぱり。

「それじゃあ、改めまして」

僕は叫ぶ

スキマに向かって

何の意味もなく

「雷堂 幸稀、呐喊します！」

第3話 『いざ！幻想郷へ！呐喊します！』（後書き）

さて、この主人公を幻想郷のどこに送ろう？

第4話 『森の中、少女と一緒に、コアラのーチ』（前書き）

改めて小説の難しさを感じた今日この頃。

第4話 『森の中、少女と一緒に、コアラのーチ』

やってきました！幻想郷！

突然ですが、現在、僕は森の中で遭難しています。

もう既に、3時間は歩いていると思いますが、全く出れる気がしません。

「……もう、ダメ。限界」

いつまでもこんな森にいたくないけど、足が悲鳴をあげているのでとりあえず休憩にします。

僕はそこら辺の倒れている木に座り、持ってきたリュックからお菓子をとり出した。

「うん！……やっぱり、コアラのーチはリリンの生み出した食の極みだね。好意に値するよ」

自分でも結構意味不明なことを言いながら、コアラのマーを食べ続ける。

すると、どこからか可愛らしいリボンを付けた金髪の少女が現れま

した。

「ねえ、あなたは食べてもいい人間？」

「……ごめん。こんな時、どういつ反応したらいいのかわからないんだ」

「そうなのかー」

「そうなのだー」

「……………」

「……………」

……うん。

会話が続かない。
どうしよう。

と、思っていると、目の前の少女のお腹から『ぐう~~~~』という音が聞こえた。

「……………もしかして、お腹空いてるの？」

「……………うん」

僕はリュックの中から、もう一つコラのマーチを取り出すと少女に渡す。

「この中には美味しい食べ物が入ってるよ。食べてみて」

少女は箱を開け、袋から一つ摘むと食べた。

「……！これ、凄く美味しい！」

「よかった。まだまだあるから、たくさん食べていいよ」

僕がそう言うと、少女は凄い勢いで食べ始めた。
こっちが少し引くぐらいに。

【20分後】

「あれ？寝ちゃったのか」

僕がゆっくりお菓子を食べていると、お腹がいっぱいになったからか、少女が寝ていた。

「仕方ない。この娘を放っておく訳にもいかないし、今日はここで

寝るか」

僕はリュックから寝袋を二つ取り出し、一つに少女をもう一つに僕が入る。

「おやすみなさい」

そう言って、僕は寝た。

こうして、僕の幻想郷初日は平穏に終わったのだった。

第4話 『森の中、少女と一緒に、コアラのーチ』（後書き）

これからの展開を悩んでたら、遅くなってしまいました。すみませ
ん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0131o/>

東方幸運録

2010年10月12日06時39分発行